

【序論】

0.1 研究動機
0.2 研究背景
0.3 研究目的
0.4 既往研究
0.5 研究方法
0.6 論文構成

【本論】

第一章 公和洋行

1.1 はじめに
1.2 公和洋行をとりまく近代上海
1.2.1 租界の誕生と発展
1.2.2 バンドの特異性
1.2.3 洋行・建築界
1.3 公和洋行概要
1.3.1 上海進出の遠望
1.3.2 公和洋行の歴史
1.3.3 上海建築の巨頭
1.4 公和洋行作品リスト
1.5 分析
1.6 小結

第二章 『申報』

2.1 はじめに
2.2 近代上海のマスメディア
2.3 『申報』概要
2.3.1 『申報』について
2.3.2 『申報』の全文データベースについて
2.3.3 『申報』における大衆的視点
2.4 公和洋行記事概要
2.4.1 概要
2.4.2 記事一覧
2.4.3 広告一覧
2.5 分析
2.6 小結

第三章 『申報』から見た公和洋行・建築

3.1 はじめに
3.2 記事概要
3.3 サッスーン・ハウス
3.3.1 サッスーン財閥の系譜
3.3.2 サッスーン・ハウスと公和洋行
3.4 香港上海銀行上海支店
3.4.1 香港上海銀行について
3.4.2 香港上海銀行と公和洋行
3.5 中国銀行新社ビル
3.5.1 中国銀行について
3.5.2 中国銀行と公和洋行
3.6 江湾競馬場
3.6.1 近代上海における競馬場
3.6.2 江湾競馬場と公和洋行
3.7 展覧会会場
3.8 コンベ
3.9 考察
3.10 小結

第四章 『申報』から見た公和洋行・素顔

4.1 はじめに
4.2 記事概要
4.3 人脈
4.4 不動産経営
4.5 事件
4.6 その他
4.7 広告
4.8 考察
4.9 小結

第五章 もう一つの近代上海

【結論】

<付録> 公和洋行の『申報』記事の全邦訳

『申報』から見た公和洋行
—大衆的視点による近代上海の素描—

2016/11/10
1X13A078-9 蔣一悠

<序論>

序論

■研究背景
公和洋行は、上海のシンボルであるバンドにおいて、半数近くの建築を手掛けたイギリスの設計事務所である。しかし、それまで上海近代史における研究が膨大な量に及んでいるにもかかわらず、日本人居留地や大上海計画、里弄住宅などに集中し、研究の偏りが見られ、また、上海の近代化において重要な役割を果たした公和洋行についての研究がかなり不足している。

■研究目的
①公和洋行の全体像の解明
②大衆的視点による近代上海の再考

■研究方法
『申報』という近代中国において最も影響力の持つ中国語新聞紙の史料を読解・分析する

■論文構成
第一章は公和洋行および近代上海の一般史をまとめ、第二章は申報における大衆的視点について説明し、第三章と第四章は申報をもとに公和洋行の全体像を解明し、第五章は改めて近代上海を考察する構成となっている。

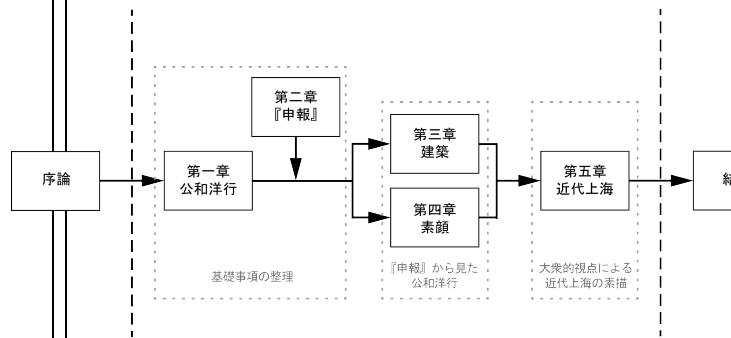


図1 論文構成（筆者作成）

<本論>

第一章 公和洋行

1842年の「南京条約」によって、上海が開港され、近代という新しい時代に突入する。欧米列強が「治外法権」をもって租界という自由な楽土にやってきたことで、小さな漁村だった上海県城が極東一の国際都市までに発展した。貿易をもってこいの地理環境をもっ

ている上海は、「冒険者の楽土」とされ、それに伴い建築業界も繁栄を極めた。上海の社会・経済が急速発展を遂げる20世紀の初めの好景気の波の乗り、大量西洋建築家が上海に進出し、上海に優れた建築作品を多く残した。その代表の一つは、イギリス資本の設計事務所公和洋行であった。

公和洋行はその設計実力をもって、上海の建築界を台頭する地位を獲得した。上海共同租界、とりわけ当時の行政・貿易の中核であるバンドにおいて、半数近くの建築を手掛けたことで名高い。その作品は新古典主義からアール・デコ、そしてモダニズムへと様式の変遷は、そのまま近代上海における都市・建築の発展過程の縮図として位置づけられ、歴史書の中で語られてきたのである。

■第二章 『申報』

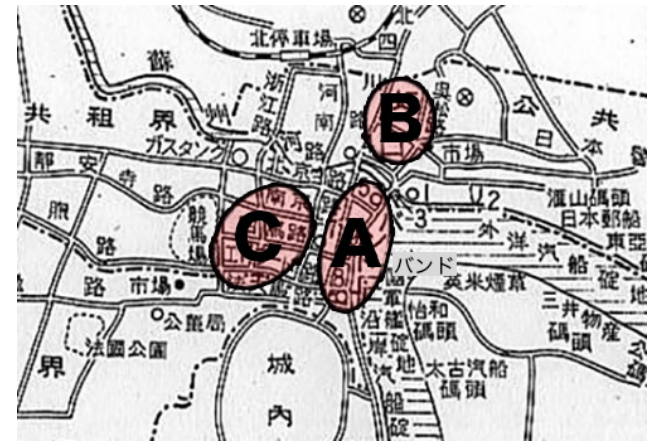


図2 近代上海のマスメディア（筆者加筆）
A：西洋メディアの中心<バンド>
B：二本メディアの中心<虹口>
C：中国メディアの中心<望平街>

「五方雑処」の近代上海では、多国籍のマスメディアが存在していた。主に西洋、中国、日本の三つに分けられ、それぞれの中心地が異なっていた。中国メディアの拠点である望平街で、『申報』が誕生した。『申報』のもつ「大衆的視点」を可能にしたのは、この望平街が列強に支配されている租界に立地していることに大いに関係がある。まず、租界の特殊な政治性を利用し、中国政府と対抗して自由な報道が可能となった。また、バンドのすぐ側に位置しているため、行政から金融、貿易、国内外の出来事などすべての情報の獲得を可能となった。

一方、『申報』が誕生する前にすでに中国語新聞紙が存在したものの、完全に西洋のやり方で作ったため、発行量はきわめて少なかった。それに対し『申報』はイギリス貿易商が営利目的で創立されたものの、すべて中国人に執筆や編集を担当させたことで、最も中国人利益と合目的性のある新聞紙となり、きわめて広い影響力をもつようになった。

つまり、『申報』は租界の中で作られ、租界ないし全国の華人に向けて、自由な言論をもって発信していた。

第三章 『申報』から見た公和洋行・建築
第四章 『申報』から見た公和洋行・素顔

第三章は建築の記事を扱って公和洋行の建築について、第四章はそれ以外のものを扱って公和洋行の素顔について、読解・分析を行った結果、公和洋行の全体像が浮かび上がった。

記事	Tag: 建築	8本	第三章 『申報』から見た公和洋行・建築
	Tag: 人脈	11本	
	Tag: 不動産経営	12本	第四章 『申報』から見た公和洋行・素顔
	Tag: 事件	14本	
広告	Tag: その他	8本	
	Tag: 広告	28本	

表1 記事の扱いについて（筆者作成）

■公和洋行が極東一の上海において台頭した理由

- ①クライアントの需要に応じて自由に意匠を操れるだけの設計実力
- ②綿密に計画を行ったことによって徹底した人脈づくり
- ③西洋か東洋にかかわらず、相手の立場や背景を熟知し、それを利用してあらゆるトラブルを解決し、ピンチを打開できるだけの賢さ

■大衆が認識していた公和洋行

- ①公和洋行の建築作品について、様式や意匠など歴史的な価値ではなく、日常生活と関連するものがより認知度が高い。
- ②公和洋行はその設計活動で歴史に名を残したが、大衆は公和洋行が行った不動産経営によって認識したところが大きい。
- ③歴史の中にある模範的な設計事務所としてではなく、手腕のすぐれた賢い西洋資本として、対立した立場で認識する場合はほとんどであった。

■公和洋行に関して新たな事実発見

- ①1912年上海支店が創立される定説に対し、少なくとも1878年にすでに上海での活動が見られた。
- ②戦争で撤退した後、再び上海で事業を再開したのは1970年代とされた定説に対し、少なくとも1947年にすでに上海での事業を再開したことが明らかになった。
- ③現在の静安寺路、大西路、西摩路という3つの道路に挟まれた100メートル未満のエリアに、万国新式家庭展覧会の会場建築という公和洋行の作品を新たに発見した。

